

少子社会における子育ての考察（第三報）

—— 子育て環境の点検 ——

河野光子

A Study on Child Raising in A Society with A Low Birth Rate (3)

by

Mitsuko Kouno

キーワード：子育て環境、反自然、しつけ、家族

1. 序

子ども達の世界にさまざまな問題や異変が起きている。自殺、殺人をはじめとして、サイレントベビーの発生¹⁾、心身症、うつ病、人格障害といった心の病の発症の低年齢化、引きこもりや子どもらしい活力に乏しい無気力現象、いじめ、不登校、学習障害、行動障害児の増加、そして学級崩壊、家庭内暴力の多発等々。

これらの問題や異変の原因は、もちろん単純ではないと考えられるが、子育ては「環境による教育」と言われているように、その背景に子育て環境の変化（子ども達にとっては“育ち”の環境の変化）の問題が深く関係しているのではないかと思われる。周知の通り、わが国の社会や生活は、戦後、とりわけ高度経済成長期以降、大きく変化した。この変化は、まさに未曾有の大激変で、それがもたらした影響は、計り知れないくらい大きい。子育てについてもその例外ではない。豊かになり、便利になり、快適となった。未来はまぶしく輝いていた。

だが、光あれば影ありで、この輝きにも陰りが見えはじめた。環境破壊や汚染の問題、少子化や子どもの異変といった子育て上の難問等がそれである。

その理由は何か。それは、人類及び人類文明は、本質的に反自然的なものであるということである。かけりの原因は、両者が内包するこの矛盾の発展、つまり反自然の行き過ぎが必然的にもたらす自己否定現象の現れではないか、というのが筆者の考えである。

本稿は、以上のような観点から、喫緊の課題であるより良い子育て模索のための子育て環境について点検・考察を行った。

但し、一口に「子育て環境」といっても、その範囲は広く、個々の環境も複雑かつ多岐であ

る。直接・間接を問わず、子どもの育ちに影響する人的・物的、有形・無形のもの全てが、その環境だからである。本稿で行う点検は、その内の数項目にすぎない。従って、本稿の目的は以下の通りである。

(イ) 点検の視点としての「反自然」の意味に関する考察

(ロ) 取り上げた項目の点検を通しての子育て環境の点検

すなわち、一般に通底する「育ち」にとって大切なものは何かを明らかにすることである。

2. 点検の視点「反自然」について

母性に関して母性神話の反論があるように、本稿の点検の視点である「反自然」に関しても反論がある。次のような反論がその一例である。

「今まで人間がやっていたことをコンピューターが代ってやってくれるから」と言って人間が退化すると考えるのは間違っている。ということを出し出すような『素朴な時代』にあこがれる人が想像しているのが明治時代か江戸時代かわからないが、その時代だって、前の時代より何かしら進歩している。そういう人達に言わせれば、人間はずーっと退化を続けていることになる。(中略) 過去の文化を教えることも重要だ。人間の本質はいつの時代も変わらないというのも事実だろう。しかし科学技術に繰り返しはしない。過去の教訓を学ぶだけでは対応できない新しい『自然』を今の子ども達は生きなければならないのだ²⁾

この批判は確かに重い。言われる通り科学技術に繰り返しはしないだけでなく、歴史も後戻りさせることはできないからである。そして今の子ども達は新しい『自然』を生きなければならないことも、また事実であるからである。それだけではない。ここで新しい『自然』とは、いわゆる人工的な環境を意味していると考えられるが、人工的といってもそもそも人間自体が自然の一部であり、それは蜜蜂が巣を作って社会生活を営み、また自らの安全のためにビーバーが水位調整のダムをつくるのと本質的な違いはないという理論も成り立つからである。

だが、ここで問題は次の点にある。「いつの時代でも変わらないという事実だろう」と述べられている、その五百万年もの歴史を有する「人間の本質」それ自体が変わりはじめたのではないか、という懸念である。

すなわち“人間は死んでも生き返る”と思ったり“人を殺すのが何故いけないのか”と平気で言ったり、何のためらいもなく親を殺したりするような子どもや若者が出てきはじめているという事実である。人間性の崩壊と言ってよい。こうした人間の本質にかかわる異変に、今の子ども達の育ちの環境が、何らかというより大きく関わりがあるのではないかという懸念である。

三歳児神話の全てを肯定するわけではないが、幼い時の育ちの環境が非常に大きい影響を子

どもの育ちに及ぼすことは紛れもない事実である。幼い時期に人間社会から捨てられ、狼に育てられたカマラが、500 万年もの歴史を持つ人間性を瞬時に失ったこと、それとは逆に敗戦後フィリピンのルバング島のジャングルで 30 年以上に亘って人間社会を隔絶した生活を送りながら、カマラのようなことは生じなかった小野田寛郎氏のことを考えてみるだけでも、それは明白である。そしてこの二つの事例は次のことを示唆しているといえないであろうか。余りにも刺激の多い、余りにも人工的な環境が、仮に無害であり耐えられるものであるとしても、幼い子ども達に、果たして大人と同じようにそれが無害であり、耐えられると考えてよいものであろうか。若い植物の苗でもしっかりと根付き、一定の大きさになる前に、濃い肥料を施すと枯死する。「飲酒や喫煙が法律で厳しい年齢制限を設けているのは何故か」という問題と同じである。それだけではない。最近では、性体験年齢の著しい低下や、子どもを産みながら「子どもは全然可愛いとは感じない」、「面倒くさいから」と簡単に子どもを遺棄したりする現象すら起こっている。

これは 500 万年の歴史を持つ人間性の崩壊どころか、36 億年もの歴史を持つ生物としての存在の根幹にかかわる大問題といえないだろうか。筆者が子ども達の異変を喫緊の問題と考え、子育て環境の点検を、子育て問題の最も重要な今日的課題とこだわる所以である。

結論は次の通りである。自然は調和がその本質である。人間もその自然の一部である。しかし、人間と人類文明は歯止めのない欲望という本質的に反自然的矛盾を内包している。それ故にこそ、自然との調和という自己規制が自らの生存それ自体のために不可欠となる。ここに子育て問題は勿論、あらゆる人間的営みにおける今日的課題解決の鍵があると考えている。

3. 環境の点検

3・1 家族

子どもにとって「家族」とは、そこで生まれ、育てられ、そして人間形成がなされる最重要かつ決定的な育ちの環境である。また「家族」は、人類誕生と共に古く 500 万年もの長い歴史を持っているといわれている。

その「家族」に最近、空洞化や崩壊の兆しがみえはじめているという。曰く、離婚・シングルマザー・ディンクスの増加や子ども虐待・放任・遺棄の頻発、家庭内暴力・尊属殺人等の発生等々。影の薄くなった父親、家族の人間関係の希薄化も、その兆しといえるだろう。

子育てにとって、これはただごとではない。「家族」とは、そもそも何であるのか。林道義氏は、「家族の発生は、人類の発生の必要条件であった」と考え、次のように述べている。点検の土台となるため、やや長文であるが以下に引用する。

「人類の生物学上の最大の特徴は、ネオテニー（幼形成熟）にある。すなわち、子供が異常に未熟な状態で生まれてくるので、母親は数年にわたって子供にかかりきりの状態を強いられる。子連れの母親は、生存能力という観点からは、きわめて弱い存在となる。その弱い母子を、父親がともに生活することによって守り、面倒を見ることによって、ネオテニーの状態で産むという戦略が可能となった。

つまり父親が、母子とともに生活を共にし、母子を守り支える役目を引き受け、家族という一つの単位を構成した時に、人類は誕生したと言える。（中略）人類にとって家族は一心同体、家族を壊してしまっただけで人類でなくなるという程に、重要な単位なのである。」³⁾

この考察が正しいならば、家族の空洞化や崩壊は、子育ての根幹にかかわる重大問題といわねばならないだろう。何故なら、人類のネオテニー化は、子どもを未成熟で産んだ上で時間をかけて、今までよりも高度に成熟させるという高等な戦略であるが、その戦略も子どもを成熟させる機能がうまく働かないと子どもは精神的に未成熟のまま、肉体だけが大人になってしまうことになるからである。いわゆる「コトナ」（コドモオトナ）である。その典型的な事例が、狼に育てられた少女カマラであろう。カマラは人間の子どもとして生まれながら、家族から捨てられ、人間社会から隔離され狼と育ったため、死は免れたが、人間脳の成熟は完全に動物の状態でストップしていた。

この成熟に関係している脳の分野が、自我や社会的知性といった高度な精神生活を司る前頭連合野で、動物としてのヒトを人間たらしめる脳領域といわれている。ここが発達しないと、自分の行動や心と感情のコントロールがうまくいかず、社会性や恥の感覚が働かなくなるという。

人の話が聞けない自己中心的な人間、すぐに「ムカツク」「キレル」若者や子ども、通路に座り込んで大声で騒ぐ高校生、授業中黒板に背を向けて私語を長々とする短大生、公衆の面前で何のためらいもなく化粧をする女性、こうした光景を目にするのは珍しくない。「カマラ化症候群」というべきこの現象は偶然であろうか。

この点に関して、前述した林道義氏は、次のように述べている。筆者は、子育ての核心と考えるため、長文であるが引用する。

「この部分を成熟させるためには『父親の威厳』を中心にした大家族の中で、幼い頃から色々な人間関係の中で揉まれて、社会性を身につけていくことが必要になる。『恥』という感覚も放っておいたのでは発達しない。豊かな人間関係を体験する中で『自分がどう見られているのか』に気を配り、また『自分の行動が他人にどういう影響を与えているか』に気を配る機能として育つのである。（中略）このネオテニー化が最も進んでいるのがモンゴロイド、つま

り黄色人種である。モンゴロイドは、アフリカのニグロイド、欧米のコーカソイドに比べると性の成熟速度、攻撃性、感情の安定性について、統計的にはっきりとした違いがある。モンゴロイドの方が穏和で、衝動的でなく、また性の成熟が遅く、子育ての期間も長くなる傾向がある。脳が柔らかい期間が長いから、学習効率がいい。いわば大器晩成型である。このようにモンゴロイドは、ニグロイド、コーカソイドに比べて、ネオテニー化という意味で更に進化が進んでいるともいえる。

しかし、進化が進んでいるとあって、単純に喜ぶわけにはいかない。ネオテニー化が進むということは、生まれる段階ではより幼い状態であり、しかもその状態がより長く続くことを意味しているからである。つまり、生まれてからの『しつけ』がますます重要になるということの意味しているのである。逆に言えば、モンゴロイドはしつけをしっかりと行わなければ、ニグロイドやコーカソイドよりも幼児的なままで、大人になってしまうということの意味している。」⁴⁾

なお、本稿では取り上げないが、今ひとつネオテニー化と子育て問題に関して、以下の問題の重要性を指摘しておかねばならないだろう。それは、子ども達の早熟化・性体験の低年齢化である。戦後、わが国の食事内容やたべものの洋風化が著しく進んだが、それにともない子ども達の早熟化が起きている。情報過多の世相、しつけのゆるみ等と相俟って子ども達の性体験の低年齢化が急速に進みつつあるということである。これは単なる健康上や風紀上の問題で済ませられることではない。人間形成上の根幹にかかわる重要問題であるということである。

人間は、教育されなければならぬ被造物といわれている。そして言うまでもなく、その教育のスタートは家庭教育であり、家庭教育の中心をなすものは「しつけ」である。だが、子育て上、これほど重要な「しつけ」が軽視されている時代もないであろう。「しつけ」の問題が、最近はやい事や「お勉強」の影に隠れ、軽視されてしまいつつあるのではないか。次にこの問題を見てみよう。

3・2 しつけ

筆者の子どもの頃（昭和20～30年代）を思い出してみると「しつけ」は結構、厳しかった。これは我が家だけが特別というわけではなく、当時はどこの家庭でも子どもにきちんとした「しつけ」をするということは、ごく普通のことであった。子どもがしてはいけないことをしているのを見かけると、親や身内の者だけではなく、近所の年長者も注意したり叱ったりするのは当たり前のことであった。最近の子どもは、物質的には大変恵まれているが、「しつけ」に関しては逆に余り恵まれていないと感じている。

幼稚園や保育園では、「年々手がかかる子どもが増えて来ている。」という話をよく耳にする。

「子は親の鏡」といわれる通り、これは子ども以上に手のかかる保護者が増えていることの裏返しでもある。

小学校や中学校では、わが子が起こしたトラブルに対し、「学校でのしつけが足りないため」とか、「担任教師の指導力に問題がある」等とクレームをつける保護者が少なからずいるという。かつての子育てでは想像もできないことである。このような親の非常識や無責任、何よりも「しつけ」の外注現象や教育の丸投げを行おうとする意識が、子育ての今日的危機を象徴しているといえないであろうか。懸念すべき最近の子どもの「しつけ」に関して、学校外教育研究会（略して学外研）が、次のような重要な指摘をしている。

「子どもの問題は、結局親に原因があることが分かってきた。そこで親の問題点を洗い出してみたところ、すべてが大きく過干渉と放任とに二極化していることが判明した。

子どもは十歳を超えると自我が確立して親のコントロールがきかなくなってしまう。十歳になるまで、鉄の熱いうちに親はどんな手を打てばよいのだろうか？

学外研で議論を尽くした結果、幼児期から小学校低学年までは、次の三つのことに気を配って軌道に乗せれば、その後は自由にさせて見守るだけでよいという結論に達した。」⁵⁾

学外研の結論とは、（１）けじめのある生活習慣をつけること （２）食事内容、睡眠時間等、心身の健康管理に注意すること （３）予習復習を習慣づけ基礎学力をつけること 以上の３つである⁶⁾。

特に新しいものは何もない。いずれもごく当たり前のこと、以前から言われて来たことである。

問題は、このごく当たり前のことが出来ていないということである。確かに平凡なことではあるが、それをきちんとしつけることが、これまでより難しくなったという事情がある。

一例を朝食で考えてみよう。毎日朝食をきちんと摂るということは、心身双方の面から非常に大事なことである。だが、そのためには親が子どもより早く起きて朝食を準備しなければならない。朝食を摂るということは毎日のことである。朝食を子どもにしつけるためには、家族皆の早寝早起きの生活リズムが前提となる。

現代社会では、子どものしつけが仕事や色々な事情で、より難しくなったことは事実であるが、かつて「しつけ」が楽であったというわけではない。「しつけ」は大事なことであっても、内容自体は面白いことでも楽しいことでもない。しかも、「しつけ」や「習慣」は、長い時間をかけて平凡な繰り返しを必要とするものである。故に以前も、それなりの努力をしていたことを忘れてはならないだろう。「子どもは親の言う通りにはしないが、親のする通りにする」といわれている。「寝ていて人を起こすな」（篤農家：石川理紀之助）という慣用句もある。

親が寝たまま子どもを起こし、「冷蔵庫の残り物を食べて遅れないように学校へ行きなさい。」と言って、朝食のきちんとした「しつけ」ができる筈がない。「育児は育自である」という大原則は、時代が変わろうとも普遍である。

なお、三点目の予習・復習の習慣づけは、子どもだけでなく、親にとっても大変な努力を要することである。また、学校の勉強が分からなくなるということが、生活の乱れを誘う要因になりがちであることは、よく知られた事実である。

生まれてくる子どもは変わらなくとも、親や社会には変化がある。子ども観の変化もその一つである。かつて子どもは「授かる」「恵まれた」と言われた。今は「つくる」「できちゃった」と言う。正否は言えないが、意識の変化が持つ意味は大きい。それは、子ども観にかかわる問題であり、子ども観は子育て観の土台となるものだからである。

双方の言葉をもとに、子育ての心構えを考えてみよう。子どもが神からの授かりものであったり、子育てが「家」や「御国」のため等、目的がはっきりしていた時代には、善悪は別として、少なくとも子育てを「何故」、「何のため」と迷い、悩むことも必要ではなかった。だが、今日ではそうはいかない。人生や生きることの意味を自己の責任において自分で考える必要がある。同様に子育てについても、親は自分でその意味を考え、納得とまでいかなくとも自分なりの了解、覚悟等の自己解決を行わなければならないからである。

この点に関してジャン伴野氏は、次のように述べている。

『朝から晩まで一生懸命働いて、子どもの世話をして大きくして……。こんなに苦労してまで、何故子どもを育てなきゃいけないの？』子育てに行き詰ってしまった時など、ついこのような愚痴も出てしまいますが、こんな時、力を与えてくれるのは『私はどうして子供を産んだのだろう』という点なのです。これがはっきりしないお母さんは、絶えず疑問や不満で一杯になり、『自分は子どもをどう育てたいのか』という子育ての方針もないまま、ただ漫然と子供と向き合っているのです。こうした親は、子育てに限らず自分自身の生き方も定まっていないことが多いものです。実はすべての子育ての出発点は、ここにあるといってもいいのです。』⁷⁾

子どもは生まれただけでは人間にならない。母も子どもを産んだだけでは親にならない。生まれることと、産むことは、共に人間になることと親になることの「必要条件」にすぎず、教育される（しつけられる）こと、子育てをすることが、その「十分条件」となる。「育児は育自」といわれる所以である。心配や苦労も多い子育てが大きな喜びとなるのは、子どもが育つよるこびと、自らが育つよるこびの二つが重なるからではないであろうか。

かつての母親は朝早くから夜遅くまで、現代の母親の 20 倍ともいわれる家事労働をこなし、

5人も6人も子どもを育てていたことを忘れてはならないだろう。「良妻賢母」という言葉が死語化して久しい。「良妻」はともかくとして、子育てが母親だけの任務・仕事ではないが、賢母でなければならないことは不朽である。母親は子どもの育ちにとって最大の環境だからである。女性の高学歴化は素晴らしいことである。しかし、その高学歴化が余りにも就職・経済的自立一辺倒にある現状は、悲観すべき傾向にあるといえよう。

3・3 自然

子どもの育ちの環境としての「遊び」の重要性、ならびに「遊び」成立の三要件減少の問題については前稿（第2報）で述べた。本稿では、三要件の一つである遊びの空間としての「自然」について、若干の点検を行う。導入として以下に二つのエピソードを挙げる。

ある幼稚園で、教師が子ども達に、水と氷は同じもの（物質）であるということをお教えるために「氷がとけたら何になる？」と質問した。ひとりの園児が元気な声で「春になる」と答えたという。これはいわゆる「お勉強」で得た知識でできる答えではない。因みに筆者の夫は、幼少期を旧ソ連国境地帯「満洲」（中国東北部）という酷寒の地で過ごしたが、「子どもの頃の待ちに待った燃えるような春の喜びを今でも忘れることが出来ない」という。

二つ目は、「転校生いじめ」の話である。戦前・戦後期も「転校生いじめ」はそれ程珍しくはなかった。田舎の小学校から東京都内の小学校へ転校した男子が、いつも皆からバカにされていた。ある時、遠足先の山で、クラスメイトがマムシに咬まれた。先生は不安になり、皆はパニック状態となった。その時、いつもバカにされていた転校生が咬まれた子の傷口の応急処置を慌てた様子もなく、適切に行った。以後、転校生をバカにするクラスメイトは誰もいなくなったという。

自然は子ども達にとって入園料も要らない有難い遊びの場であるだけでなく、二つ目のエピソードのような「生きる力」を育てる学習や知恵、そして様々な発見や感動を与えてくれる最高の空間である。自然の中で友達とよく遊んだ子は、社会性も創造力も豊かに育つといわれている。それは、自然が出来合いのものは何一つ与えてはくれないが、様々なイメージを育む刺激や無限の素材を与えてくれるからである。また、子ども達は自然の中で遊びをより楽しくするために、お互いに教え合ったり、見習ったりしながら知恵を絞り、協力を行うからである。それだけではない。自然は子ども達にとって不思議なことがいっぱい「魔法の国」、絶えず変化する「未知の国」、恐ろしい目・痛い目に合うこともある「危険な国」でもある。そうした自然について知識が豊富で、様々なことを教えてくれるリーダーや先達を、子ども達は憧れ尊敬する。素直に先人の話を聞き、学ぶ喜びを遊びの中で学習する。「子どもにとって自然と友達が最高の教師」といわれ、「子ども達にとって自然の中での群れ遊びが最高の遊び」といわれる所以である。

開発・都市化・汚染等で、子ども達から多くの自然が奪われてきたことは周知の通りである。しかし、その中であっても「土」は比較的触れやすい自然物であろう。「土」こそ自然の象徴であり、かつては心身の健康のため「朝露に濡れた土を素足で踏み」と言われたものである。最近の保護者の中には「土は汚い」「バイキンが一杯だから」といった理由で、「土遊びは園でもさせないで欲しい」という者もいるらしい。子どもに限らず人間は土から遠ざかれば遠ざかる程、心身ともにひ弱になるのではないだろうか。

幸田真音氏は以下のように述べている。

「日本人の清潔志向には、近年ますます拍車がかかっている。あたりを見回すと、世の中には除菌や抗菌・消臭を促す商品があふれんばかりだ。過激なまでの潔癖症は、汗や唾液、フケや眼垢等々生きている証でもある排泄物や臭いまでも否定する社会に変えてしまった。『加齢臭』などという言葉が横行し、自分の臭いにノイローゼになる『自己臭症』に悩む患者も増えてきたという。超清潔症候群は、抵抗力を低下させ、身体的な衰弱を招いただけでなく、人と人との触れ合いまでも否定し、感性や情熱の萎縮など精神的な衰弱をも引き起こした。『きれいな社会は、間違いなく異常な人間を増やしてきた』のである。（中略）自然な排泄をありのまま受け入れる社会には悲惨な親子殺しなどなかったことを、あらためて真剣に考えてみる必要がありそうだ。」⁸⁾

農の基本は「土づくり」といわれている。自然を含む望ましい子育てへの環境づくりは、いわば「子育ての土づくり」⁹⁾ といっておよいだろう。

注・引用文献

- 1) 泣かない、笑わない、反応がない、母を求めない等という「静かな赤ちゃん」。いわゆる手のかからない赤ちゃん。
- 2) 坂本健：人工の自然，「毎日新聞」，2007.11.11 朝刊
- 3) 林道義：第1章 家族は人類の基，「家族の復権」，中公新書，p14，2002.
- 4) 前掲書：第1章 家族は人類の基，「家族の復権」，pp.23-25.
- 5) 学校外教育研究会：学外研は考える。「親は、コレさえすればよい」，「子どもが10歳になるまでに親はコレさえすればよい」，教育史料出版会，pp.172-173，2006.
- 6) 前掲書：学外研は考える。「親は、コレさえすればよい」，子どもが10歳になるまでに親はコレさえすればよい，p.173.
- 7) シャロン伴野：3章 なぜ子供を産んだのですか？，「子どもを伸ばす魔法の言葉」，コスモトゥーワン，p.71，2007.
- 8) 幸田真音：極端な『きれいな社会』に警鐘，「毎日新聞」，2007.9.14 夕刊
- 9) 子どもの育ちに対する「環境」の影響を、ごく大まかな数字で表せば胎児（100%）、0～3歳（99～70%）、4歳～10歳（69～50%）、11歳以上（49%以下）となるであろうか。
なお、子どもの知的能力や社会適応性に極めて悪い影響を及ぼすといわれている「環境ホルモン」は、

本稿のテーマと密接に関連する重要問題であるが、その環境的要因が子育てプロパーのものとは異なる特殊な性質なものであるため、取り上げなかったことを付記する。